

茨木のり子の詩をどう評価するか？

西原大輔(広島大学教授・詩人)

west@hiroshima-u.ac.jp

「発表の目次」

- 一、東京大学での講演(一九九一年六月六日)——僕が直接お目にかかった唯一の日のこと
- 二、とても寡作な詩人——僕の好きな詩三篇を読む
- 三、十の視点——茨木のり子作品に頻繁に登場する発想や技法
 - ① 散文精神——文法構造が散文的な作品が多い
 - ② 命令と禁止——きつぱりとした断定的なもの言い方
 - ③ 左翼気分——戦後知識人の主流であった反体制的「気分」が濃厚
 - ④ 直喩の詩人——初期作品には「ように」「ような」を用いた常識的な比喻が多い
 - ⑤ 列挙法——名詩を羅列する手法がしばしば使われる
 - ⑥ 古代への憧憬——人類の長い歴史を見据えた「千年の眼」を持つ詩人
 - ⑦ 朝鮮文化への関心——『韓国現代詩選』につながるもの
 - ⑧ 金子光晴崇拜——自由人への憧れをこの詩人に託していた
 - ⑨ 感受性——この不思議な鍵語
 - ⑩ 生涯富裕層——一度も勤めに出る必要のなかった医師一族の人

一、東京大学での講演(一九九一年六月六日)——僕が直接お目にかかった唯一の日のこと

○梁東国「茨木のり子氏の講演会」、『比較文学研究』第六十一号(一九九二年)、二二—二五頁。

二、とても寡作な詩人——僕の好きな詩三篇を読む

○生前の詩集収録作品は僅か一六〇篇(8頁参照)。この中で最も広く知られているのは次の三篇。
2 「わたしが一番きれいだったとき」、6 「自分の感受性くらい」、10 「倚りかからず」
この三篇に共通するのは教訓性だろう。「わたしが一番きれいだったとき/わたしの国は戦争で負けた」「自分の感受性くらい/自分で守れ」「もはや/できあいの思想には倚りかかりたくない」。わかりやすい教訓性が、大衆に支持される所以。しかし、これらは本当に名作と言えるのだろうか？

○その次くらいに有名なのはたとえば……

- 1 「根府川の子の海」、1 「もつと強く」、2 「六月」、2 「小さな娘が思ったこと」、3 「花の名」、3 「女の子のマーチ」、3 「汲む」、3 「私のカメラ」、6 「木の実」、10 「水の星」

○しかし、僕が好きなのは次の三篇。紋切型の安易な教訓を語った右の三篇より、遥かに良い。

- 6 「青梅街道」 ↓現在を相対化する「千年の眼」で、今この場所の人の営みを見つめる。
- 3 「花の名」 ↓死と生、葬式と結婚・赤裸々な欲望、二つの対極的なものが交差する。
- 1 「根府川の子の海」 ↓青春を愛惜する、普遍的な主題を扱った詩。失われた青春への挽歌。

三、十の視点——茨木のり子作品に頻繁に登場する発想や技法

① 散文精神——文法構造が散文的な作品が多い

○「茨木さんの詩業は、亡くなった後に公にされた『歳月』によって成就したと私は考えています。それまでの作のうちにも幾多の秀作がありますが、それらはどちらかと言えば読者の知性に訴えるものが多く、むしろ茨木さんのうちなる散文精神が詩の形を借りていたというふうには見えません」。谷川俊太郎「初々しさ」、谷川俊太郎選『茨木のり子詩集』（岩波文庫、二〇一四年）、三頁。

○一つの実験として、詩「詩集と刺繍」に句読点や符号を付けて、散文形式で書き直してみると……「詩集のコーナーはどこですか？」勇を鼓して尋ねたらば、東京堂の店員は、さつさと案内してくれたのである。刺繍の本のぎっしりつまった一角へ。そこではたと気づいたことは、詩集と刺繍、音だけならばまったくおなじ。ゆえに彼は間違っていない。けれど、女が尋ねたししゅうならば、刺繍とのみ思い込んだのは、正しいか、しくないか。札を言つて、見たくもない凶案集など、ばらばらめくる羽目になり、既に詩集を探す意志は砕けた。二つのししゅうの共通点は、共にこれ、天下に隠れもなき無用の長物。さりとて絶滅も不可能のしるもの。たとえ禁止令が出たとしても、下着に刺繍するひとは絶えないだろう。言葉で何かを刺しかがらんとする者を根だやしにもできないさ。せめてもと、ニカツと笑つて店を出る。（6「詩集と刺繍」）

② 命令と禁止——きつぱりとした断定的なものの言い方

○大岡「茨木さんは戦争中、学徒動員されていた時に、級長さんが何かで全校に号令……。茨木級長じゃなくてですね、みんなテストされて、声がかいということを選ばれただけ。大岡そりやそうじやないでしょ。やっぱり姿形から何から全部含めて、隊長の器だったんですよね」。茨木のり子・大岡信「対談」美しい言葉を求めて、「茨木のり子詩集」（岩波文庫、二〇一四年）、三三二—三三三頁。

○号令をかける軍国少女。「退役将校が教官となつて分列行進の訓練があり、どうしたわけか全校の中から私が中隊長に選ばれて、号令と指揮をとらされたのだが、霜柱の立った大根畑に向つて、号令の特訓を何度受けたことか。／かしらア……右イ／かしらア……左イ／分列に前へ進め！／左に向きをかえて 進め！／大隊長殿に敬礼！ 直れ／私の馬鹿声は凜凜とひびくようになり、つんざくような裂帛の気合が籠るようになった。そして全校四百人を一糸乱れず動かせた。「はたちが敗戦」、『花神ブックス1茨木のり子』（花神社、一九八五年）、七二頁。

○命令形——強烈な言い方。プロレタリア文学が愛用した語法でもある。

「野火の夢を拒絶せよ！」（1「武者修行」）

「自由の小鳥になれ／自由の猛禽になれ」（2「学校 あの不思議な場所」）

「飾りを筆れ 飾りを筆れ／わが魂らきいものよ！」（2「友あり 近方よりきたる」）

「自由！／法律の本のなかでうたた寝しているもん字に／火をつける！」（3「秋が見せる遠い村」）

「館練るへらを空に投げる」「叩き売れ」「世襲を怒れ」「世襲を断ち切れ」（3「最上川岸」）医師は？

「一本の蠟燭のように／熾烈に燃えろ 燃えつきろ」（4「言いたくない言葉」）

「自分の感受性くらい／自分で守れ／ばかものよ」（6「自分の感受性くらい」）

「落ちこぼれ 華々しい意志であれ」（7「落ちこぼれ」）

「山よ 新緑どよもして／大いに笑え！」（10「笑う能力」）

○禁止形——これもプロレタリア文学が愛用した語法

「ひとのせいにはするな」「友人のせいにはするな」「近親のせいにはするな」「暮しのせいにはするな」「時代のせいにはするな」(6)「自分の感受性くらい」

○男なんて殴ってやる！ 修辞とは言え暴力的な「殴る」「蹴る」。女による暴力的表現。

「今日も学校で二郎の頭を殴ってやった」(3)「女の子のマーチ」

「先祖伝来の藁仕事なんか けとばすがいい」(3)「最上川岸」

「束の間の夢のなか／わたしは人を殴らんとしている」(6)「殴る」

「どう言いくるめようか／どう圧倒してやろうか／だが」(7)「聴く力」

③左翼気分——戦後知識人の主流であった反体制的「気分」が濃厚

○富裕層の茨木のり子は、決して筋金入りの左翼ではないが、作品には「左翼気分」が繰り返し現れてくる。その表現は底が浅い。金銭の苦勞を知らない金持ちマダムの観念的左翼気分。

「メーデーのうた巷にながれ」「革命の実のみのるときが」(2)「見えない配達夫」↓戦後の時代性。

「沈黙は抵抗運動の仲間のように完璧だ」(2)「悪童たち」↓戦後の時代性を感じさせる比喩。

「この国では つつましく せいっぱいに／生きてる人々に 心のはずみを与えない」(5)「大國屋

洋服店」↓世界の中で日本以上に、庶民の生活福祉が保護されている国は、決して多くはない。

「万世一系論」「来歴がかくもはつきりしているのは／むしろ嘘多い証拠」(6)「系図」↓反皇室。

「政府という名の尻尾／性懲もなく生えてきて」(7)「苦い味」↓茨木のり子は無政府主義者？

「武士道は なかった」(9)「なかつた」↓第二次世界大戦時に、立派な言動をした日本人は多い。

「血はじぶんじしんのために使い切るもの／敢えて捧げたいんなら／もつとも愛する身近なひとのためにこそ」(9)「血」↓自分と家族さえ幸せであれば良いという利己主義的発想。戦後イデオロギー。

「なぜ国歌など／ものものしくうたう必要があるでしょう」「起立して／直立不動でうたわなければならぬか／聞かなければならないか／私は立たない 坐っています」(10)「鄙ぶりの唄」↓僕は、茨木のり子のようにには考えない。どの国の国旗国歌にも敬意を表すべき。まして母国には。

○茨木のり子の詩や文章は、左翼的な言説に満ちている。これをどのように評価するべきだろうか？

詩人は、全校生徒に号令をかける「中隊長」の軍国少女だった。社会の主流となるイデオロギーは、戦中から戦後にかけて大きく変わった。しかし茨木のり子は、時々の社会が良しとする大勢の見解を語る詩人に過ぎなかったのではないだろうか？ 反戦平和、安保反対、植民地支配への反省。茨木のり子の政治思想には独創性が欠けており、平凡で無難な思想だったというのが、今の僕の判断である。生涯富裕層の令嬢・奥様であった以上、社会の大勢と対峙する必要など、どこにもなかったのである。左翼「気分」という言葉を使う所以である。

④直喩の詩人——初期作品には「よつな」を用いた常識的な比喩が多い

○初期三詩集、1『対話』・2『見えない配達夫』・3『鎮魂歌』には、直喩「よつな」「よつな」が多く使われている。第四詩集以降は使用例が減少する。当初は詩の本質を比喩だと理解していたらしい。

「あなたの瞳が／湖のように ほほえむのを／水蓮のように花ひらくのを」(1)「魂」↓比喩の連続。

「青春が嵐のようにどつと襲つてくると」(1)「ごもたち」↓かなり平凡な比喩。

「籠屋が竹籠を編む／なめらかに 魔法のように美しく」(1)「小さな渦巻」↓常識的な比喩。

「こそ泥のようにやってくる／五月の風のようにやってくる／きまぐれな種子のようにやってくる／きまぐれな種子のようにやってくる」(2「行動について」) ↓「ように」四連発。

○直喩を分類してみる。「ように」の前に出てくる名詞のみを取り上げると……

「人間の用例」王妃、あなた、若者、山師、山男、男、姉、こそ泥、仲間、囚人、女、風来坊、子供、伯父甥、僧、シュールベルト、童女、一寸法師、舞妓、

「植物の用例」水連、茸、銀杏、蕘、水仙、蘭の花、アカシア、泰山木、種子、酸漿、

「動物の用例」熊、螢、鰐、獣、蟻、蚤、蝗、兔、小鳥、小魚、鮭、虎、ゴキブリ、寒雀、蝶

「水類の用例」湖、雨だれ、岩清水、噴水、水道栓、波、靄、潮騒、波紋、河、田沢湖、水

「自然の用例」光、風4、火、嵐、薪、森、陽、陽炎、

◎「食物の用例」果物、チーズ、パン、果実、葡萄酒、生牡蠣、塩、南瓜、桃、マカロニ、酒樽

◎「装飾の用例」真珠、シャンデリア、ダイヤ、水晶、頸飾り、宝石、

「人工物の用例」風船、万国旗、拳銃、ラベル、カヌー、花火、紬、古雑巾、凧、てるてる坊主、

「その他」ドッジボール、ひきつり、魔法、風俗、しわぶき、内緒ばなし、使い、八俣の大蛇、栖

この世の終わり、頸すじ、幻、居合抜き、軽わざ、約束、あかり、蠟燭、

⑤ 列挙法——名詩を羅列する手法がしばしば使われる

○安易な列挙で詩的效果を挙げていない例も多い。ただし、「青梅街道」は成功例。大岡信は次のように述べている。「二つのものを対立的に扱うか、それとも二つの似たもの、共通要素を持つものを並列していくか、その二つの方法をしばしば詩の中で使っているんですね」。茨木のり子・大岡信「『対談』美しい言葉を求めて」、『茨木のり子詩集』(岩波文庫、二〇一四年)、三二二頁。

「そうしてわたしは好きになる／日本のささやかな町たちを／水のきれいな町　ちやちな町／とろろ汁のおいしい町　がんこな町／雪深い町　菜の花にかこまれた町／目をつりあげた町　海のみえる町／男どものいばる町　女たちのはりきる町」(2「はじめての町」) ↓散文精神のあらわれ

「もとはと言えば高句麗・百濟経由ではるばると／伝えられたものではなかったか／文字　織物　鉄　革　陶器／馬飼　絵描き　紙　酒つくり／衣縫い　鍛冶屋　学者に奴隷」(3「七夕」)

「スペインの地名が好き／マラガ　バルセロナ　サンチャゴ　レオン／マドリッド　セビリヤ　トレド　コルドバ／バレンシア　ジブラルタル／そして　グラナダ……」(5「スペイン」)

「くるみ洋半紙／東洋合板／北の誉／丸井クレジット／竹春生コン／あけぼのパン／街道の一点にバス待つと佇めば／あまたの中小企業名／にわかには新鮮に眼底を擦過」(6「青梅街道」)

「胡桃いろ　象牙いろ　すすきいろ／栗いろ　栗鼠いろ　煙草いろ／色の和名のよろしさに　うっとりする」(8「色の名」)

「絵を見てゆきながら／題名にも目が走り／黒いピエロ／親代々の旅芸人／(列挙十七行省略)／心高貴なれば首こわばらず／辻々に売春の灯がともる／題名をばらばらに呟けば　それすらも／詩よりもはるかに詩になっている」(9「ルオー」)

⑥ 古代への憧憬——人類の長い歴史を見据えた「千年の眼」を持つ詩人

○茨木のり子の詩には、しばしば古代が登場する。エジプト・北京原人・西域・縄文・古事記・古墳など。「どうも古代に惹かれがちの気質がありますね、昔から」。茨木のり子・大岡信「『対談』美しい言葉を求めて」、『茨木のり子詩集』(岩波文庫、二〇一四年)、三二〇頁。

「あなたはエジプトの王妃のように／たくましく／洞窟の奥に坐っている」(1「魂」)
「おお遠く／パピルスから伝わる／膨大な史書に」(1「ひそかに」)
「蓋をあければ失せていた古墳の冠」(1「いちど視たもの」)
「藤原道長さん／年表じゃあなたの全盛もたったの五センチに」(4「ゆめゆめ疑う」)
「魏志倭人伝の昔より／そうそうと吹く／あまつしま風／かまと風」(5「あそぶ」)
「上へ上へと遡ってみた素戔嗚尊の心は／なつかしい」(「そこで出会った榎名田姫が」(5「箸」)
「ばしばし昏倒させた確かな手ごたえ／シナントロプス・ペキネンシス時代の快感を」(6「殴る」)
「飛鳥おとめや星宿にかこまれて／石室にねむっていたのは だれ」(7「高松塚」)
「流沙に埋もれ／幾千年を眠っていて／ふいに寝姿をあらわにされた／楼蘭の少女」(7「幾千年」)
「西域に美しい娘がいたという／晋の王が遠征の途次／有無を言わず馬上に掠奪」(7「笑って」)
「長さ四センチばかりの幼児の足形／青森県六ヶ所村出土／縄文時代後期」(9「足跡」)
「イヤリングを見るたびに おもいます／縄文時代の女たちとおなじね」(9「娘たち」)

○茨木のり子は、人類の長い歴史の中に現在を位置付ける「千年の眼」を持っていた。谷川俊太郎に決定的に欠けているもの。人類はどこに居るのか？

「千年くらはひ ひとねむり」(7「高松塚」)
「百年生きたつて人間は野茨の実をちよいとつまみ／跡かたもなく消え失せる名なしの鳥とかわらな
い」(4「ゆめゆめ疑う」)

「人類は／もうどうしようもない老いぼれでしょうか／それとも／まだとびきりの若さでしょうか／
誰にも／答えられそうにない／問い／ものすべて始まりがあれば終りがある／わたしたちは／いまい
つたほどのあたり？／颯颯の初夏の風よ」(9「問い」全文)

○世俗的栄華を相対化する「千年の眼」。本当に価値のあるものとは何か？

「藤原道長さん／年表じゃあなたの全盛もたったの五センチに」(4「ゆめゆめ疑う」)

○人間の営みや命のはかなさ。それ故のいとおしさ。

「街道の一点にバス待つと佇めば／あまたの中小企業名／にわか新鮮に眼底を擦過／必死の紋どこ
ろ／はたしていくとせのちにまで／保ちうるやを危ぶみつ」(「かつて幕末に生きし者 誰一人とし
て現存せず」「たったいま産声をあげたる者も／八十年ののちには引潮のごとくに連れ去られむ／さ
ればこそ／今を生きて脈うつ者／不意にいとおいし 声たてて」(6「青梅街道」)

○古代も今も変わらない人間の営み。普遍性。石垣りんが生活や台所の火に見出した普遍性を、茨木
のり子は装飾品に見ている。家庭環境や社会階層の違い。富裕層の詩人。

「イヤリングを見るたびに おもいます／縄文時代の女たちとおなじね」(「くりかえしくりかえす
よそおい／波のように行ったり 来たりして／波が貝殻を残してゆくように／女たちはかたみを残
し 生きたしるしを置いてゆく」)そしてまた あらたな旅たち／遠いいのちをひきついで さらに
華やぐ娘たち」(9「娘たち」)

⑦ 朝鮮文化への関心——『韓国現代詩選』につながるもの

○いくつかの詩には朝鮮や朝鮮語への憧れが描かれている。

「むかし高句麗の王が亡命して住んだ村」(2「奥武蔵にて」)

「もとはと言えば高句麗・百濟経由ではるばると／伝えられたものではなかったか」(3「七夕」)

「澄酒 カリタ カリタ と傾けて／波音のチャルサー チャルサー 捲き返す宿で」(6「波の音」)
「あなたの顔は朝鮮系だ 先祖は朝鮮だな」と言われたことがある／目をつむると見たこともない朝鮮の／澄みきった秋の空」(6「顔」)

「いかなる国の言語にも遂に組み伏せられなかった／勁いアルタイ語系の一つの精髓へ——／少しでも近づきたいと／あらゆる努力を払い／その美しい言語の森へと入ってゆきます」(7「隣国語の森」)
「韓国の老人は／いまだに／便所へ行くとき／やおら腰をあげて／(総督府へ行ってくる)／と言う人がいるそうな」(9「総督府へ行くてくさ」)

「日本語と韓国語ちやんぼんで／過ぎこしかたをさまざまに語り／こちらのうしろめたさを救うかのように／あなたとはいいい友達になれると言ってくれる／率直な物言い／楚々とした風姿」(10「あの一ひとの棲む国——F・Uに——」)

○韓国には俳句・短歌がなく、その分現代詩が賑わっている

「現在、ソウルの大きな本屋——たとえば教保文庫とか鐘路書籍に行ってみると、詩集コーナーの大きさに驚かされる。八重洲ブックセンターや紀伊国屋の詩集コーナーに比べたら、六、七倍、いえ、もっと大きいかもしれないという豊饒さ。更に驚かされるのは、詩集コーナーにむらがる若者たちの熱気である。高校生から大学生ぐらいの青年男女が、むさぼるように詩集を読んでいる。(中略)隣国のひとびとの詩を好むこと尋常ならず。」「あとがき」『韓国現代詩選』(花神社、一九九〇年)、一九二—一九三頁。

⑧金子光晴崇拜——自由人への憧れを「の詩人に託していた

○金子光晴が心酔したアルツイバーシェフの小説の主人公「サーニン」というのは主人公の名まえですが、かれはたいへん気ままで、自由自在で、無欲で、なにもものにもとらわれない、いわば「自由人」ともいうべき性格の男です。茨木のり子『個人のたたかい——金子光晴の詩と真実』(童話社、一九九九年)、一五頁。お嬢様育ちで勤務医夫人の茨木のり子は、自分に欠けているものを金子光晴に見ていた。茨木自身は良家の子女で、良い結婚をし、豊かで安定した家庭生活を過ごした常識人。全校生徒に号令をかけた元女級長の、自由不良に対する憧れでもあっただろう。

○茨木のり子の詩では、金子光晴への熱烈な憧れが語られている。

「あ 金子さんだ！ 金子さあん／金子光晴氏にキスをする」(4「ゆめゆめ疑う」)

「彼は／日本の隠しておきたい大事なトラの子に／おもわれてきた」(5「トラの子」)

「天狗わざと喋っていいほどの／膨大な仕事を果しながら」(6「底なし柄杓」)

「晩年の金子光晴がぼつりと言った」『今頃になって沁みってくる その深い意味が』(9「瞳」)

「あなたが逝った五月／一月あとの六月に／金子光晴さんが逝きました」(12「道づれ」)

⑨感受性——「の不思議な鍵語

○詩「自分の感受性くらい」の「感受性」の使い方が、僕には今だに良く理解できない。「苛立つ」「初心消えかかる」「ひよわな志にすぎなかった」「駄目なことの一切」。これらは、信念・意志・意欲の問題ではないのか？なぜ「信念・意志・意欲くらい自分で守れ」ではなく、「感受性」なのか？茨木のり子の頭の中はどうなっているのか？「感受性」のこの多義性はいったい何なのか？

「子供の悪態にさえ傷ついてしまう／頼りない生牡蠣のような感受性／それらを鍛える必要は少しも

なかったのだな」(3「汲む」)↓ここでは「傷つきやすい繊細な心」とほぼ同義。

「君たちの感受性は、どだい狂っている／女といえども切りたい者は髪を切り／パーマをかけない者もいるてば！」(4「寒雀」)↓ここでは「価値観」とほぼ同義。

「自分の感受性くらい／自分で守れ／ばかものよ」(6「自分の感受性くらい」)↓強い信念や意志

⑩生涯富裕層——一度も勤めに出る必要のなかった医師一族の人

○高度経済成長期、生活のために働かなくて良い専業主婦は、婦人の理想ではなかったか？ 茨木のり子は、お金を稼ぐために勤労をする必要のなかった人。富裕層。有閑マダム。一方、家事や家庭を負担に感じるキャリア志向の婦人でもなかった。薬剤師として働いたことはない。恵まれた医師一族の奥様。「男何するものぞ」と言いつつ、専業主婦に安住しているこの言行不一致はいったい何？

○茨木のり子には「名もない」の用例が多い。富裕層詩人による庶民の理想化。無意識の階層。

「まわりの人達が沢山死んだ／工場で 海で 名もない島で」(2「わたしが一番きれいだったとき」)

「屑の星 粒の星 名のない星々／うつくしい者たちよ」(2「夏の星に」)

「漁師 うどんや 瓦屋 小使い／好きだった名もないひとびとに囲まれて」(3「花の名」)

「ぱったり出会う／名もない川べりで」(3「りゅうりえんれんの物語」)

「跡かたもなく消え失せる名なしの鳥とかわらない」(4「ゆめゆめ疑う」)

○茨木のり子の言行不一致が如実に現れているのが、詩「倚りかからず」。「じぶんの耳目／じぶんの二本足のみで立っていて／なに不都合のことやある／倚りかかるとすれば／それは／椅子の背もたれだけ」。大変立派な主張だが、経済的に父と夫に依存し続けた。その点をいったいどう思っているのか？ あなたに男に気楽に依存してきたのではないですか？ どうして堂々と「倚りかからず」などと言えるのですか？ お金を稼ぎ続けるのがどれほど大変なことか、経験したことはありますか？ お金を稼がない女の自立って一体何ですか？ 僕が茨木のり子に直接尋ねてみたい質問の数々。

○総じて詩集『倚りかからず』には、安易な作品や安直な表現が多い。僕は、七十三歳で刊行された詩集『倚りかからず』に、茨木のり子の精神的な老化を感じずにはいられない。

「木は旅が好き」↓戦後詩の使い古された主題「木」に、安っぽい懂れを託した、極めて平凡な詩。

「鶴」↓テレビ番組の趣旨をなぞって表現しただけの作品。この番組は僕も見た。平凡でがっかり。

「あのひとの棲む国」↓韓国の友人F・Uに過剰な思い入れ。政府批判も型にはまってありきたり。

「鄙ぶりの唄」↓「なぜ国歌など／ものものしく……」「私は立たない」。独創性に乏しくありきたり。

「疎開児童も」↓「生んだ子らに躰をかけるのを忘れたか」。安易な若者批判。精神的老化そのもの。

「時代おくれ」↓安易な反文明主義。「そんなに急いで何をするの／頭はからっぽのまま」。安っぽい。

○茨木のり子は、生涯にわたって男に経済的に依存し続けた。薬剤師の免許を取得しても、働きに出ることは一切なかった。自立を目指すこともなく、恵まれた特権的富裕層として一生を過ごしたことに、詩人は全く無自覚だったと思われる。お金持ちの開業医の父、収入の多い勤務医の夫に、経済的に庇護され続けた人生だった。にもかかわらず、どうして堂々と「倚りかからず」などと言えるのか？ 恵まれた境遇にある自分の社会的的位置に、あまりに無自覚ではないか？ 詩「疎開児童も」の若者批判、詩「鄙ぶりの唄」の国歌に対する不敬の意志、詩「時代おくれ」の反文明主義などは、すべて安易な「できいの思想」ではないのか？ 「もはや／できいの思想には倚りかからず」という自信たっぷりの態度は、一体どこから来るのか？ 僕はここに、茨木のり子の限界を見る思いがする。